

## 我 が 生 活 の 反 省

ヤコブ書第一章二十六節に「人もし自ら信心ふかき者と思ひて、その舌に巻(くつわ)を著(つ)けず、己(おの)が心を欺かば、その信心は空しきなり。父なる神の前に潔くしてけがれなき信心は、孤児と寡婦とをその患難の時に見舞ひ、また自ら守りて世に汚されぬ是なり」という事が書いてあります。

私たちは自分の信仰生活を反省してみると、最も神の前にお詫び申上げなければならない事は、信仰生活すなわち信仰生活の実践、行為とすることに欠けるのであります、何故に信仰と行為が神と人の前に一致出来ないかといふ事を深く考えてみると、そこに私たちはイエス・キリストを信ずる信仰の不徹底という事を思いめぐらさねばならないのであります。

私たちの生活の一つ一つをキリストを信せざる人々の生活に比較して考えてみますなれば、正直に申してキリスト者の生活以上の道徳生活を誇り得る人は少ないと申さねばなりません。確かにいわゆる世の師範ともなるべき人で、我らの遠く及ばないほどの道徳堅固なまた博学な人格の方も世には多少はおられるのであります、一般的に申してキリスト者の道徳生活は世人に比して高いといわねばなりません。それ故に僅かな過失、わずかな欠点さえも、キリスト者なる故に大いに目について世人のそしりを受ける場合が多いのであります。ですから常

識的に申せば、その行為の上で、わが生活を反省しても、心の底から相済まないといふ思はは出て来ないのではなかろつか。

口には何とか謙遜の言葉を出しても、心魂に徹して生活の反省がその行為から出発して自分に迫つて来るであるうか暗々裏にキリスト者には世間より高い道徳的生活を誇るもののが確かに存在しているのであります。その一種の気位こそは、キリスト者として何者にも勝つて反省しなければならぬ罪であり大欠点であります。信仰あるがいとくにして信仰なき生活から生ずる驚くべき傲慢であります。「もじ眞田なりしならば罪なかりしならん。然れど見ゆと言ふ汝の罪は過れり」とイエスによつて指摘せらるべき罪であります。

我らの信仰生活を反省して何の誇るべきものがありましょうか。ただ誇るべきは主イエス・キリストの十字架の外はないのである。

毎年主の受難の週を迎えて、我らは口が信仰生活を反省し、また懺悔(カヨバ)せしめられるのはただイエス・キリストの十字架の御愛に対しても感激感奮して、おのれを生ける神のそなえものとしているかじつかの信仰に対する徹底した反省であつて、けつしてキリスト者として守るべき歩むべき、誇るべき道徳生活の反省ではないのである。

主イエス・キリストの召を蒙(いひむ)つし我らキリスト者は初めから肉によれる賢き者多からず、能力ある者多からず、貴きもの多からず、世の愚かなる、弱き、卑しき、軽んぜられ、無きがいときものなのである。さればいか、イエス・キリストのお選びを受けたのであります。これ神の前に人の誇る事ならんためであります。

イエス・キリストのみが、神に立てられて我らキリスト者の智慧と義と靈と救贖いとになり給い、我らはイエ

ス・キリストを信じ頼ることを誇りとしているのであります。

私たちは今夜ここに私たちのために十字架上に死に給いしイエス・キリストを信ずる信仰の外に、何者かを我らの生活の中に必要としたかどうかを反省せねばなりません。この時代に私たちはイエス・キリストの父なる神の外に何らかの権力を望んでいるかどうか心に聞く必要があります。イエス・キリスト及びその十字架に釘づけられ給いし事のほか、何をも知るまじと心を定めてこるであるつかどうかを反省せねばならぬ。

天に在(いま)す私たちの父なる神といつも一緒に生活していたか、いるか、いたいかをよくよく心に聴いて見ねばなりません。ほんとうに肉身の両親の愛にも優る父なる神の愛に生きているか、父の神から自分が独立し、対立しているのではないかどうかを反省する事が大切である。「神のもとめ給ふ祭物(そなえもの)はくだけたる靈魂なり、神よなんじは碎けたる悔ひし」をからしめ給ふまじ「神は欠点だらけ、実行力なきものでも子たるものに碎けたる悔いし心を喜び給う。子たるもの悔いし祈りを喜び給う。祈祷会において一つとなつて祈る教会を愛し給う。キリスト者が、世人より少々道徳的であること等喜び給わないと想います。受難週はイエス・キリストの十字架に直面して心碎け信仰を賜わり、救の歡喜を感謝する事に外ならないと思います。

(一九四〇・三・一八 於札幌北一条教会受難週祈念)